

東北大学医学部保健学科

同窓会新聞

発行人 進藤千代彦
 発行所 東北大学医学部保健学科
 仙台市青葉区星陵町2の1
 編集人 東北大学医学部保健学科同窓会新聞編集委員会
 編集委員 半藤徹也、武石陽子、石塚裕也

ご退任される先生の挨拶

平成27年度をもって、看護学専攻から、末永カツ子先生、南優子先生、高橋香子先生、栗本鮎美先生、井上由紀子先生、須藤久実先生が退任されることになりました。6名の先生方から代表して末永先生にご挨拶を頂戴しましたので、ご紹介致します。

地域ケアシステム看護学分野

教授 末永 カツ子



『ふるさと』
 3. 11の地震・津波と原子力災害は、多くの人命を奪いました。幸いにもその時、生命の危機から逃れることができた人々からも『ふるさと』を奪い、その人生を変えてしまいました。

私の『ふるさと』は、福島です。実家は、事故から4年半過ぎた昨秋に除染しました。避難している幼なじみ一家は、この春にも戻らず、お孫さんは避難先の小学校に入学すること。事故から5年たちますが、

実家の近くの仮設住宅に住む方々が『ふるさと』へ帰れる日はつきません。震災から5年経過し、孤立しがちな人が仮設に残る中、孤独死が増加していることも気がかりです。

私たち人間は、自然を恐れ敬い生活してきました。そして、この自然の脅威に対してTechnology(科学技術、学問技術体系)を駆使して克服しようとしてきました。長い人類の歴史のなかで原子力災害は、科学の進歩がもたらした新たな脅威といえます。

災害をもたらす自然現象は、生態系のrefresh(回復、再生)ともいわれます。この現象は、生態学の視点で見ると、競争力の強い種が弱い種の排除状態を掃し、多様な種が生育を可能とする生物多様性を保持する自然の営みでもあります。この自然現象の循環は、気候を安定化し、水質を浄化し、人間の生活環境の安定化させます。災害は、そこに人間が存在しなければ災害とはならないのです。しかし、地球上の人口増加等により、昨今の被害は大規模なものになってきています。

人間は、農耕社会へ移り田畑を広げ定住するようになり人口を増加させてきました。狩猟採集生活であった世界の人口は、1万年前には400万人、8千年前は500万人に達していたそうです。しかし、狩猟採集だけが生活手段なら3000万にとどまるといわれています。

ます。今や、世界の人口は、70億人を突破し都市に集中し沿岸部や河川の河口域に住んでいます。これらの土地は、大規模な被害を受けやすい場となります。今後、いかに人間と自然とが折り合いをつけていくかが私たちの重要な課題です。これに、現代社会においては、Technologyによる人為的な災害が加わることも忘れてはなりません。

『ふるさと』とは、かつて、通い住んだ懐かしい土地や家があるところ。また比喩的には、精神的なよりのところでもあります。私の『ふるさと』は、春になると、桃、梨、林檎の花が次々と咲き、秋には実りを迎えます。花芽の時期に霜が降り冷害となることはあっても、原子力災害を被るとは思いもよらないことでした。私は、今、汚染された『ふるさと』でなにかできることがないか考えているところです。



平成28年2月12日退職教授最終講義にて

また、放射線技術科学専攻から、細貝良行先生が退任されることになりましたので、ご挨拶を紹介いたします。

画像解析学分野

講師 細貝 良行



保健学科の立ち上げ当初から本学に関わってきましたが、今年度をもって東北大学を退職することになりました。退職後は国際医療福祉大学に教授として赴任します。今にして思えば、東北大学の教員として学生教育・研究などに携わってきましたが、とても楽しい日々が過ごせたと同時に、やり残したことが沢山あるような気がします。特に学生諸氏に対する教育は、日々自問自答を行いつつ、結果として中途半端な形になってしまったのでは無いかとも感じています。東北大学病院から東北大学へ赴任し、何も解らないまま教育に従事することになり、解っているつもりで解っていないことが沢山あることに気がつきました。また、人に教える難しさや楽しさも学ぶことができました。その様な意味で、こちらでの日々は自分としても大きく成長することができたと感じられる日々でありました。その成長過程で学生諸氏と接することで、結果として中途半端な形になってしまったのはある意味当然のことであり、自分の力量の無さが原因であると考えます。しかしながら、人はいくつになっ

ても成長することができず、たぶん、成長することを止めてしまつたら、つまらない日々になってしまふかと思えます。自分は未だ成長過程で勉強の真最中です。前述の中途半端な結果はその過程の賜物であると笑って許していただければ幸いです。最後になりますが、同窓生の皆様方には沢山のことを教えていただき本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

ウェアセレモニー

今年度は、平成27年9月28日に検査技術科学専攻、9月30日に放射線技術科学専攻のウェアセレモニーが行われました。式当日は、下瀬川医学部長、清水保健学科長からの激励の挨拶の後、代表学生が決意表明を行いました。代表を務めました学生さんの決意表明の言葉を紹介します。

検査技術科学専攻3年

母良田 静



まず、本日は、このような立派な式を開いていただき、ありがとうございます。入学してから今日まで、ともに勉学に励み、試験や学内実習を乗り越えてきた仲間たちと今日という日を迎え、共に臨床の場に出ていることを嬉しく思います。一つの節目となるこの日に、これまで私たちに指導してくださった先生方、この場をお借りして心から感謝申し上げます。今まで学んできたことが臨床の場での位通用するのか、という緊張や不安はありますが、実際に臨床検査技師として働いておられる方々の中で実習をさせていただくことで、一つでも多くのことを学



び取る、という意識を常に持ち続けます。将来臨床の場に出ようと考えている者もそうでない者も、この実習で得るたくさんの経験、知識、技術が必ず役に立つと信じ、日々励んで参ります。また、キャンパスとは異なり、実習とはいえ、一つの職場社会の中にいるということを決して忘れず、社会人としても恥ずかしくない行動に努めます。

最後に、私たちは東北大学という素晴らしい環境で学び、東北大学病院という大きな病院で実習ができるという恵まれた環境に感謝すると同時に、誇りに思います。

以上、検査技術科学専攻を代表し、決意表明とさせていただきます。

放射線技術科学専攻3年

岩瀬 涼香

平成27年度
放射線技術科学専攻
ウェアセレモニー



昨年9月30日、私たちはウェアセレモニーで初めて白衣を身にまといました。私たちは医療従事者の一員になる存在なのだという実感が初めて湧きました。私は学生代表のスピーチで「単なる見学に終わらないよう積極的に行動する」と宣言をしました。しかし、座学しか経験してこなかった私たちが現場に急に出てどう振る舞えばいいのだろうか、患者さんとうまく接することができる



だろうかという不安もおぼえました。不安を抱えたまま迎えた実習初日は緊張で体が強張っていましたが、技師の方々がフレンドリーに教えてくださり、すぐに落ち着いて実習に取り組むことができるようになりました。半年間実習を経験してみると、技師の方々の丁寧な指導のおかげで広く、多くの知識を学ぶことができました。その中には患者さんとの接遇や、他の医療職との関係、最先端医療など現場でしか学べないことも多くありました。患者さんとは初めはどのように接してよいか分からず、まごついてしまいましたが、技師の



方がそばについて何をどのように話せばよいかひとつひとつ指導してくださいました。ある病院では患者さんを呼ぶところから撮影終了まで一連の体験をさせていただきまし

た。中にはたどたどしい対応だったにも関わらず撮影終了後に私の目を見て「ありがとう」と声をかけてくれた患者さんもうらっしゃり、自分が社会の役立つ喜びを感じるとともに早く現場で働きたい気持ちでいっぱいになりました。しかし、技師の方の質問に答えられず自分がいかに勉強不足であるかを痛感することもしばしばありました。私たちにまだ半年の実習期間が残っています。実習の日数は今までの倍となり、また今までより実践に近い実習になると聞いています。挫けそうになることもあるかもしれませんが、ウェアセレモニーで誓った初心や実習中に感じた喜びを忘れず、引き続き気を引き締めて実習に臨みたいと思えます。

卒業研究発表会

平成27年度の卒業研究発表会が行われました。各専攻の担当教員よりご報告を承りましたので、ご紹介いたします。

分子内分泌学分野

教授 菅原 明



2015年11月26日に、検査専攻の平成27年度卒業研究発表会が保健学科大講義室で開催されました。今年度は、検査専攻内部での研究の発表が13題、医学科での研究の発表が13題、障害科学での研究の発表が5題、公衆衛生学での研究の発表が1題、加齢医学研究所での研究の発表が4題、災害科学国際研究所での研究の発表が1題、臨床研究推進センターでの研究の発表が1題、生理検査センターでの研究の発表が1題、メディカル・メガバンク機構での研究の発表が1題と、様々な分野・領域での研究成果が報告されました。内容的には分子生物学・遺伝子改変マウスから疫学まで多岐にわたっており、会場は学生さん・指導教官でほぼ満席となり、大変な熱気のもとで座長・進行役の学生さんたちが手際よく会を進行し、これら40題の演題発表が無事行われました。今回の研究発表は、学生さんたちにとって、どの方面に進むにしても非常に貴重な重要な経験・財産になったと思われる。今後の飛躍に役立つことを期待してやみません。



老年・在宅看護学分野

講師 齋藤 美華



2015年度(9期生)の看護学専攻卒業研究発表会が2016年1月13日(水)に行われました。学生は、これまでの講義や実習を経て看護に関する各自の興味関心を基に研究室を選択し、担当教員の指導を受けながら1つの研究テーマに取り組み、研究のプロセスを学び、学生それぞれが論文を作成します。4年間の集大成として、約1年間かけて行った研究の締めくく卒業研究発表会があります。

今年度の卒業研究の内容としては、体位変換や創傷治療過程支援などにおける看護技術の科学的実証に関するもの、生活習慣病や自律神経活動への関連や影響を検証したもの、運動学や臨床的所見から検証したもの、周産期およびジェンダー看護、教育における実態調査や科学的実証研究、文献検討研究に関するもの、地域住民や地域の看護職を対象とした地域保健活動や地域ケアシステムに関する実態調査や介入研究、文献検討研究に関するもの、終末期リハビリテーションやターミナル期や緩和ケア、成人期における患者家族の心理や家庭環境に関する文献検討研究や実態調査、子どもと家族の健康に関する意識や関連性を検討したものの、高齢者の社会参加や在宅療養における家族介護者を対象とした文献検討研究、男性看護師の役割、がん患者およびその家族の体験や闘病継続の支援

に関する文献検討研究、評価および関連性を検討したものなど、研究のテーマや手法も多岐に渡っていました。発表会では当日の進行だけでなく、前日からのスライドの映写や会場準備も学生が主体となり行っています。

卒業研究発表会を経て、研究の成果を学会で発表したり、論文を学会誌に掲載する学生もいます。また、今回の経験により、研究への関心がより高まり、現場における看護の探求につながる学生もいることでしょう。卒業研究発表会は、4年間のまとめとしてだけでなく、研究者としての第一歩になるとともに、看護職者として地域や臨床において看護を提供していくものとして糧になるものと思います。学生が今後も大いに活躍していただくことを願っています。



放射線治療学分野

教授 武田 賢



平成27年11月26日(木)、同年夏に竣工した星陵オーデトリウムで、放射線技術科学コース卒業研究発表会が開催され、寸暇を惜しんで準備を重ねてきた同コース4年生により活発な議論が行われました。以下は其の発表内容です。

- 医用物理学分野&東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター
 - ・原発巣からの自発的転移を介した骨転移モデルマウスの開発
 - ・高分解能X線CTイメージングによるリンパ行性転移メカニズムの解析
 - ・金ナノロッドと近赤外光を用いたがん光熱療法の開発
 - ・生体数学モデルを用いたアミロイドPET薬剤のSUVR予測と血漿入力関数が与える影響の検討
 - ・小動物用PET装置における逐次近似型画像再構成パラメータの最適化
 - ・ラットでの画質評価
 - ・ラットPETデータをを用いた118FEDGヒト被ばく線量の非侵襲的算出法の研究
- 放射線検査学分野
 - ・血管造影IVR従事者の水晶体被曝線量評価に関する基礎検討
 - ・画像情報学分野
 - ・NPSによる非線形フィルタ効果のスライス依存性評価

○医用画像工学分野

- ・MTF測定の新法開発過程で遭遇したPSF法の新たな問題と解明
- ・大脳基底核線条体放射線ニューロンにおける短期記憶効果の検証の試み
- ・高空間分解能MRI用マウス3D脳アトラスの作成
- ・乳房X線画像の定量的乳房密度推定法と乳がん危険因子解析

○画像診断学分野

- ・低濃度デジタルファントムを用いた医用モニタ解像度特性に関する研究
- ・オートプシー・イメージングの肺所見：虚血性心疾患VS非虚血性心疾患



○画像解析学分野

- ・CT画像における下顎骨を用いた性別判定
- ・多焦点ファンビームコリメータによる心電図同期SPECTの位相分割に関する検討
- ・人口ルビーを使用したIVR時における被曝線量測定システム

放射線治療学分野

モンテカルロ法(EGS5)を用いたモデルベース線量計算アルゴリズムの不均質領域における評価

以上の発表がありました。各研究室の特長が遺憾なく表現された素晴らしい発表会であったと思います。発表終盤間際まで続いた講堂内の熱気が冷める事無く、来年度以降も繋がって行く様、心から願っております。

第9回リトリート 大学院生研究発表会

平成28年1月23日(土)、第9回リトリート大学院生研究発表会が開催されました。今年度の会場は、昨年7月に完成したばかりの星陵オーデトリウムで行われました。演題数は過去最多となる合計112題(口頭25題、ポスター87題)におよび、1日ばかりの学会となりました。そこで今回は、この研究発表会で自分の研究を報告した4名の学生さんに感想を戴いたので、ご紹介したいと思います。

看護学専攻

4年 由利 静香



由利さんは、この時期ようやく助産実習、卒業研究を終え、国家試験を目前に控えてのリトリートでの発表者者のほとんどが大学院生の中、学部生は今年、由利さんを含む10名、医学科8名、薬学部1名、保健学科1名。由利さんはリトリート史上初めての保健学科からの発表でした。6分間の発表は堂々とし簡潔にまとめられ、他分野からも質問が上がりました。発表後は、毎年リトリートを支えられている医学科長石井直人教授(免疫学分野)、今年多くの学部生発表者を指導した医学研究科阿部高明教授(病態液性

制御学分野)からコメントを戴きました。由利さんはこの度、東北大学総長賞に決定いたしました！おめでとうございます。今後のご活躍を期待しております。(文責 武石陽子)

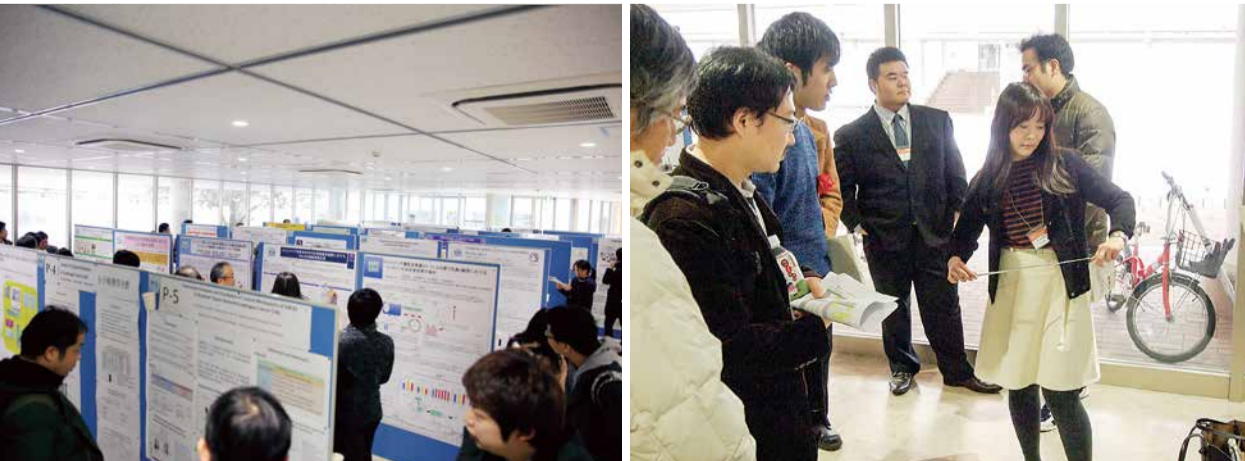
地域保健学分野 博士前期課程1年 吉田 薫



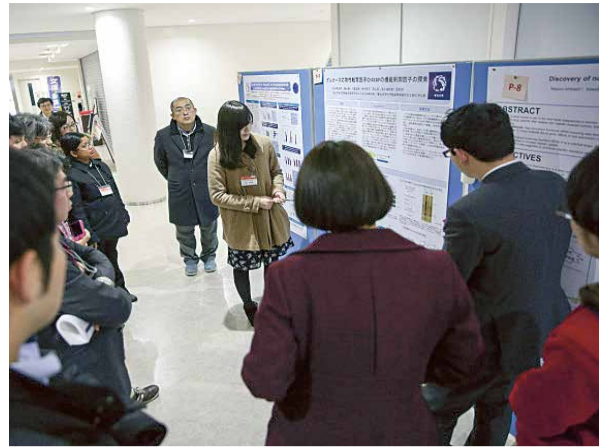
先日行われたリトリート大学院生研究発表会で、ポスター発表をさせていただきました。

今回の発表は、平成27年3月に保健学科を卒業し大学院生となった私の、初めての研究発表となりました。準備過程においては、先輩方のポスターや、保健学科棟に掲示されている他の専攻の学生のポスター等の構図等を参考にしながら作成したのが記憶に新しいです。修士課程における研究内容は、肺がんの疫学研究で、がんの家族歴と肺がん罹患との関連について調べています。入院時の自記式質問紙調査で、両親または兄弟・姉妹に、がんにかかった人がいるかどうかをたずね、がん家族歴ありの人は、なしの人を基準として肺がん罹患リスクが何倍であるかを算出します。今回の発表では、肺がんの家族歴に限定していましたが、今後の解析では、他の主要ながんの

家族歴と肺がんとの関連についても明らかにしていきます。疫学研究は、客観性が高く、また奥が深く、地域保健学分野南教授からご指導をいただきながら行っており、私自身まだまだ勉強不足であることを自覚しながら日々励んでおります。今回の発表は、あと1年間研究活動を行っていく上で多くのことを吸収し、改めて肺がんのメカニズムを考えるための手がかりに寄与したいと思う私なりの着実な一歩を踏み進んだ発表会であったと振り返ってみて思います。



分子内分泌学分野
博士前期課程1年
野呂 英理香



私は、糖尿病などの生活習慣病の発症・進行に関与する転写因子の転写調節機構の解明を目的に研究を行っており、これまでの研究成果をポスターにて発表しました。発表は数人ずつポスターの前に立って行い、その後、質疑応答を行う形でした。発表では、自分の行ってきた研



究の成果を限られた時間の中で様々な分野の方々へも分かりやすくかつスムーズに伝えることの難しさを痛感しました。それと同時に、質疑応答では、様々な方から質問や意見を頂き、自分の研究に対する理解や今後の方向性について見直す良い機会となりました。

また、星陵オーデトリアムの講堂にて行われた口頭発表では、自分と同じ学生が研究成果を堂々と発表し、活発に議論が交わされる様子にとっても刺激を受け、自分もさらに意欲的に研究を行っていきたく強く感じました。

他分野の研究者や学生の前で発表を行ったり、交流を持つたりするこ



とのできる機会は限られているため、このような発表の場は自分の視野や見識を広げ、今後の研究を躍進させるための重要な機会であったと思います。今後はこの経験を生かして自分の研究に取り組んでいきたいと思っています。

感染分子病態解析学分野
博士前期課程1年
宮原 杏奈



私は現在、感染分子病態解析分野に所属しており、ポスター発表を行っていました。以前に学会で発表を行ったことはありましたが、聴衆との距離が近く、また、若手研究者の方が真剣に聞きに来てくださり、いつもとは違った緊張感がありました。本発表会は専門分野が集まる学会とは違い、東北大学医学系研究科内の若手研究者の発表会であるという点で非常に魅力的であると感じております。

医学系研究科では医学の発展に貢献するような独創的で先進的研究が

行われています。様々な研究内容を、専門性を超えて発表し合うことができる本発表会では、東北大学の先進性を再認識できたと同時に、私が研究テーマを遂行するにあたって、新たな切り口を提供してくれた場でもありました。また、若手研究者同士の発表会であったため、より刺激的で、研究に取り組むモチベーションも上げることができました。

研究は非常に大変だと私は感じております。期待するデータが出なかつたり、再現性がとれなかつたりする方も多いのではないのでしょうか。しかし、自らが貪欲に勉強し周囲からの助けも借りながら常に挑戦する気持ちさえあれば、成し遂げられないことはないと思います。私は、大学院生活も残すところあと1年程ですが、研究者として様々な学会で発表できるよう努力していきたいと考えております。そして、私を取り組んだ研究の一部が、世界の人々を救う臨床応用の研究に繋がっていつてくれたら幸いです。

保健学科D棟への一部分野の移動

保健学科B棟の南側にある仮施設が、保健学科D棟となりました。今年1月より一部の分野がこちらへ引っ越しとなり、保健学科B棟内のレイアウトも少し変わりました。保健学科D棟へ移動した分野は次の通りです。

内分応用医科学分野、画像解析学分野、ウイメンズヘルス看護学分野、がん看護学分野、緩和ケア看護学分野、周産期看護学分野、成人看護学分野、老年・在宅看護学分野



保健学科D棟

お知らせ

◆保健学科同窓会について

東北大学校友会(しゅうゆうかい)は、創立100周年を迎えた2007年に次の大学づくりの礎として東北大学校友会として発足しました。同窓生に加えて、現職の教職員や在校生とその家族など、東北大学の関係者が会員となっており、部局別同窓会・登録同窓会・年次別同窓会の3つの基礎同窓会から構成され、本会運営の基礎単位となっています。この度、部局別同窓会(学部、研究科、附置研究所等の別により組織される同窓会のこと)に医学部保健学科同窓会が入会しましたので、お知らせ致します。理事は前保健学専攻長の高橋和広教授、代議員は前保健学科長の塩飽仁教授です。(部局別同窓会一覧URL…

<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/alumni/alumni.html#contents02>
 保健学科同窓会では、卒業生の皆さんの情報を名簿として管理しています。結婚等による氏名変更や住所変更があった場合には、下記アドレスまでご連絡ください。
hoken@alumni.med.tohoku.ac.jp

◆保健学科同窓会総会開催日程

日時：2016年7月8日(金) 17時半～
 場所：保健学科A棟 大講義室
 総会後、3専攻のそれぞれの同窓生からの帰朝報告がございます。どうぞ、お楽しみに。

編集後記

初めての編集作業で大変でしたが、何とか新聞を完成させることができました。私は検査のウェアセレクト二、卒業研究発表会、リトリートの記事を担当させていただきました。早く編集に協力してくださった皆様に感謝したいです。 半藤 徹也

年度末の忙しい時期に寄稿してくださった先生方、学生の皆さん、本当にありがとうございました。今年7月の保健学科同窓会総会で、多くの同窓生の方々とお会いできるのを楽しみにしております。 武石 陽子

新聞作成に協力していただいた先生方・学生の皆さんありがとうございました。また協力をお願いすることもありますがその時はどうぞ宜しくお願いします。 石塚 裕也